

〔武江年表^九〕嘉永三年八月八日夕七時頃夜五時頃より大雨大雷曉に至て江戸並近邊百餘所へ墮ける由なり諸人恐怖す

〔南留別志^二〕一降真香は雷をさくる物なり雷にやかれて身のくろくふすぶりたるに是をたきたる烟にてふすぶればやがて白くなるなり是をも同じ比より護真香といひならはせりくだるといふには雷のおつる心あるを忌めるなりけり

〔内安録〕一吹上御庭の樹木を伐たる時柚の居る所へ落雷せしにその柚驚たる氣色もなく何ぞ持居るかと問へば雷除の解毒丸といふものを所持せしといふその藥何方の製法かとはへば古河醫師より出したるといふ堀田筑州大病の時御醫奈須玄竹に療治を被仰付全快に付金十枚に此雷除解毒丸の法を被下しとぞ

〔窓の須佐美^三〕秋の頃雷の落たりし時營中宿直の人の行廚をはこぶとてさし荷ゆく下部にあたりて其所へ倒れしが半かゝりて死もやらず身はうち碎ける如くにて手足もなへてあつかふべき様もなきを板に乗せてよふくと持歸り人の教たるに任せ鮒をすりつぶして總身にぬる事二夜三日に及べり初一日より後いつとなく濕び出三日後はやうくゑるしある様にて五七日ぬりければ常のごとくになりぬ

〔閑田次筆^四〕むかし彦根の士父子居間を異にしてありしが雷鳴甚しく正しく其子の居れる室へ墮たる音を聞て父やがて走り行ていかにくといへばこゝに侍ふと烟氣の中よりこたふ立よりて見れば半身焦れながら氣はたしか也しかばさまざま療治して平復したりしとなりめづらしき豪氣の人もあれば有ものなり凡震死せる人其身の焦るは稀にて音におびへ肝を潰せるが多し或は墮たる家は障なくて其隣の人の震死せるもまゝ聞ゆ是等は響の筋に觸たるものといふはさもあるべし臍ひらくものは不救といへり俗に雷が臍を掴むといふも此こ